

『トスカ』の舞台装置について

経営システム工学科 1年 K. M.

私が注目したのは「トスカ」の舞台装置である。

授業で見たのは 2000 年にミラノ・スカラ座で上演され、指揮者はリッカルド・ムーティ、トスカ役はマリア・グレギーナ、カヴァラドッシ役はサルヴァトーレ・リチートラ、スカルピア役はレオ・ヌッチのものである。美術監督はマルゲリータ・パッリ、演出家はルカ・ロンコーニである。今回はこの舞台装置について考える。

第 1 幕の幕が開いたときから、○後ろの歪んだ柱や建物がものすごく存在感を放っていると思う。遠近法ではなく、歪んでいるといった風である。「キュビズム」という、遠近法を無視して、色々な角度から見たものを再構成してひとつの画面に収める技法がある。この舞台装置はキュビズムを取り入れたのだと思う。カヴァラドッシがマグダラのマリアの絵を描くために使っている足場や礼拝堂は普通なのに、○教会の柱や壁が斜めになっていて、教会の天井に描かれている青い空と天使が見えている。キュビズムの技法を使い天井を見えるようにし、薄暗い舞台に鮮やかな青を取り入れている。

○舞台装置の歪（いびつ）さによって少し不安感を覚え、「これから何が起こるのだろうか」と、トスカ、カヴァラドッシ、スカルピア、アンジェロッティと主要な登場人物が全員死んでしまうという悲劇的なトスカの世界観により引き込まれる効果があると思う。マグダラのマリアの絵画も胸元がはだけていて、聖母マリアではなくマグダラのマリアといった雰囲気が出ている。

第 2 幕のスカルピアの執務室ではその歪んだ背景を隠すかのように大きな絵画が 3 つ配置されている。BS2 のクラシックロイヤルシートという番組で放送された rade film 制作による実際のファルネーゼ宮殿を使ったトスカを見ると、ファルネーゼ宮殿には壁に絵が描かれている部屋があるので、スカルピアの執務室はこれを意識したのだと思う。暗くて絵がよく見えないが、描かれているのは剣を持った屈強な男たちに見える。これはスカルピアの内面をあらわしているのではないかと思う。自分の権力やプライドを誇示しているのではないだろうか。

○2 幕では拷問室への扉として使われているドアは、1 幕でアンジェロッティが隠れるときに使っていたドアと同じもので、限られた舞台装置をうまく使うオペラの構成に感心する。

第 3 幕では歪んだ柱と照明の淡い色があいまって悲壮感の漂う空間に変わっている。

○客席から見て舞台の右側に配置されている剣を持った天使の彫像は聖アンジェロ城の屋上に本当にある天使の像と同じものを置くことで、舞台が聖アンジェロ城の屋上であることを示している。やはりオペラは予備知識がないと細かい演出に気がつけないと特に思った場面である。

また、カヴァラドッシが投獄されている牢屋の檻が三角形に配置されているところも面白いと思う。○普通の感覚だと四角形に配置するところを三角形に置くことで客席から檻の中の登場人物が見やすくなっている。

○カヴァラドッシが銃殺された場所が既に屋上なのでトスカがこれ以上階段を登る必要は現実ならばないが、さらに階段を登って観客の気持ちをたかぶらせていると思う。

授業で見た DVD もそうだが、やはり舞台を見るときには登場人物たちに目がいってしまうだろう。○しかし、舞台の全体を大きく余すことなく使ってオペラの世界観を見事に表現している舞台装置もオペラの見所のひとつだと思う。